

「誰一人取り残さない」ための1人1台端末活用

～環境整備と活用推進の取り組み～

すべての子供たちの可能性を最大限引き出す教育が求められている中、教室には、発達障害や特異な才能、家で日本語を話す頻度が少ない子供、家庭の文化資本の差による学力差等、学級には様々な特性を持つ子供が存在し、これらの特性が複合しているケースもある。同学年による同年齢の集団は、同調圧力が働きやすく、学校に馴染めず苦しむ子供も一定数存在し、不登校・不登校傾向の子供は年々増加の一途をたどっている。さらには、一斉授業スタイルでは、一定の学力層に焦点を当てざるを得ず、結果として、いわゆる「浮きこぼれ」「落ちこぼれ」双方を救えていない現状。また、困難を抱えていても、一見困難に直面しているように見えず見過ごされてしまう場合がある。このように、子供たちが多様化する中で、教師一人による紙ベースの一斉授業スタイルは限界にきている。

発達障害の可能性のある子供 (学習面or行動面で著しい困難を示す)

- ・ADHD(注意欠如多動性障害)
 いつもそわそわして、じっと座ってられない。いろいろなものに気が散り、授業に集中できない。
- ・LD(学習障害、読字障害)
 文字が流暢に読めなかったり、板書に時間がかかったりして、授業の進度に合わせられない。
- ・ASD(自閉症スペクトラム)
 学習活動の見通しが持てないと不安になる。暗黙のルールがわからず、突然発言してしまう。

発達障害※1
 2.7人
 (7.7%)

特異な才能のある子供

- 授業が暇で苦痛。価値観や感じ方の共感も得られなくて孤独。発言すると授業の雰囲気壊してしまう。
- 小3から中学数学、小5で数ⅡBをやっていた。
- 4歳のころ進化論を理解して、8歳で量子力学や相対性理論を理解していた。

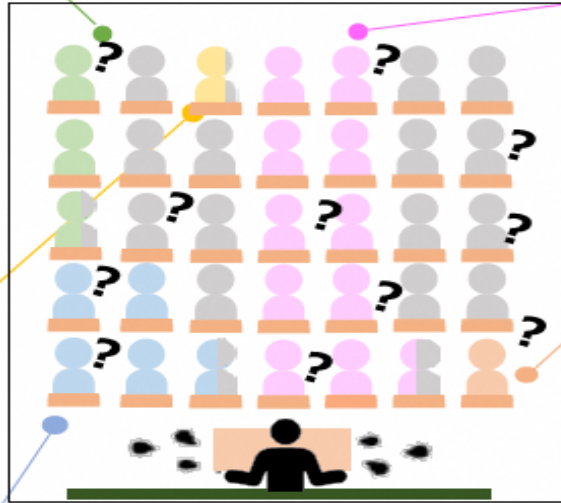
特異な才能のある子供※2
 0.8人
 (2.3%)

不登校・不登校傾向の子供

不登校※3
 0.4人
 (1.0%)

不登校傾向※4
 4.1人
 (11.8%)

小学校 35人学級



家にある本が少ない子供※5
 10.4人
 (29.8%)

家庭の文化資本の違い

家にある本の冊数が少なく
 学力の低い傾向が見られる子供

※家にある本の冊数と正答率の間には相関
 家にある本が10冊又は25冊と答えた割合



家で日本語をあまり話さない子供※5
 1.0人
 (2.9%)

家で日本語を話す頻度の違い

家で日本語を「いつも話している」子供と「全く話さない」子供の間には、正答率に差が見られる
 ※家で日本語を「全く話さない」「ときどき話す」と答えた割合

子供たちの特性や関心・意欲は様々

話すこと・聞くこと
 書くこと・読むこと
 が得意な子供

文字情報・
 音映像などの情報の扱
 いが得意な子供

音やダンスで
 表現することが
 得意な子供

特定の分野に極めて
 高い集中力を
 示す子供

興味や関心が
 拡散しやすい子供

特定の分野などに
 関心・意欲や知的好奇心
 が旺盛な子供

※例示している特性が複合しているケースも多い。
 ※特性として示している子供についても、状況にはグラ
 デーションがあり、様々であること。
 ※このほかにも、学校には、病気療養で学校に通えない
 子供やいわゆるヤングケアラー等、多様な背景や困
 難を抱える子供が存在している

【出典】※1 通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果 平成24年12月 (文部科学省) 「2.7人(7.7%)」の数字は、ADHD、LD、ASDの内訳を示したものではない。

※2 日本には定義がないため、IQ130以上を仮定し、知能指数のベルカーブの正規分布を元に算出。子供の吹き出しは、文部科学省 特定分野に特異な才能のある児童生徒に対する学校における指導・支援の在り方等に関する有識者会議アンケートを参考に編集。

※3 不登校 年間に連続又は断続して30日以上欠席 (令和2年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査(文部科学省))

※4 不登校傾向 年間欠席数30日未満、部分登校、保健室登校、「基本的には教室で過ごし、皆と同じことをしているが、心の中では学校に通いたくない・学校が辛い・嫌だと感じている」場合など含む (不登校傾向にある子どもの実態調査 (日本財団))

※5 令和3年度 全国学力・学習状況調査 児童質問紙、生徒質問紙結果より内閣府において作成。全国平均値等を1クラスに仮に見立てた場合のイメージ図。実際には偏在等は生じている可能性が有る旨留意。

児童生徒質問内容: あなたの家には、およそどれくらいの本がありますか。(家にある本の冊数は、家庭の社会的経済的背景を表す代替指標の1つ)

児童生徒質問内容: あなたは、家でどれくらい日本語を話しますか。(家で日本語を話す頻度の状況を確認するための質問事項)

出典:令和4年6月22日、総合科学技術・イノベーション会議、Society5.0の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ(案)

【環境整備】「誰一人取り残さない」ための1人1台端末活用

【基本情報】

(1) 端末本体（充電ケーブル、アダプタ含む）

- ・ Pad（第7世代）ストレージ32G
- ・ LTE通信

(2) キーボード付ケース

- ・ Logicool製（Rugged Combo3）

(3) メインアカウント

- ・ Googleアカウント

(4) ソフト・アプリケーション（有償）

① 小学校

- ・ ロイロノート（学習支援）
- ・ Navima（デジタルドリル）

② 中学校

- ・ ミライシード（学習支援・デジタルドリル）

(5) ソフト・アプリケーション（無償）

- ・ 計101個活用可能（令和5年9月30日時点）
- ・ スライド、レポート作成（Keynote等）
- ・ 音楽、動画制作（iMovie、GarageBand等）
- ・ ノート、メモ（GoodNote、メモ等）
- ・ 双方向オンライン（Google Meet、Zoom等）
- ・ 支援（VoiceTra、文字起こし）※個別対応
- ・ 教科に特化したもの（空間図形、天体、描画）



(1) 児童・生徒

- ・ 令和2年度中にすべての児童・生徒に同一の端末を貸与
- ・ LTE通信により、場所や家庭環境に関係なく、学びを継続。
- ・ 充実したアプリケーションにより、一人ひとりの学び方に適したツールを選択。

（例：学びをノートにまとめる場面）

- ①ドキュメントアプリでレポート形式にまとめる
- ②ノートアプリでまとめる
- ③写真撮影して、自分のペースでまとめる
- ④従来通り、ノートにまとめる

(2) 保護者

- ・ 保護者負担なしで端末、通信費、キーボード付ケース、学習支援ソフトの導入



(1) めざすビジョンの共有

①枚方版ICT教育モデルの策定・改訂

- ・枚方市が大切にしている5つのCの視点

「Challenge」「Communication」「Collaboration」「Creativity」「Critical thinking」

- ・デジタル・シティズンシップ教育の推進（例：ICT委員会設立、ICT総会実施、教科取組）

②Hirakata授業スタンダードの策定・改訂

(2) 教職員の資質・能力向上

①情報教育推進ワーキングチーム（令和2年度～4年度）

- ・各校から中核となる教職員を選出（64名）

- ・各グループに分け、リーダーを中心に1人1台端末の活用を議論、実践、事例の共有

②教職員研修（オンデマンド）、指定校の研究実践の掲載

- ・まなViVA!ひらかた（市独自ポータルサイト）に掲載

(3) 端末操作・授業づくり支援

①市独自授業実践事例集（HI-PER）の収集

- ・約750事例（令和5年10月31日時点）

②活用事例動画の作成

- ・みんなで高めよう！ICT 20 Steps（iPad、Googleアプリの基本的な活用動画）16本

- ・Appleアプリケーション（基本操作、応用操作、カメラ、スライド、動画制作）18本

③大阪府や民間企業の活用事例集ウェブサイトリンク集の整理

- ・GiGAスク!ひらかた（市独自ポータルサイト）に掲載